

スを警戒して、面会はガラス越ししか許可されないのだろう。内心怒っていて、視線を合わせないようにしているのだ。ガラス越しの面会の歌は、「心の花」誌上だけではなく、私が選を受け持っている新聞の投稿歌壇等でも多く出逢った。

ほこほこの鳴門金時たべながら水に降る雪母と見て
をり
山本枝里子

母上とお互い無言でいる時間をうたっている。だまって二人でさつま芋を食べながら、雪を見ている。今月のこの作者の歌の中に「テレビの音三十七で……」という歌があり、母上は耳が遠いらしい。だから用事があるときは別として、お互いだまったままで、視線を共有することが多いのだろう。短歌の表現としては、視線の共有を表現した下句がいい。

昨日まで赤ちゃんだった柴犬よそんなに早く大人になるな
平井麻奈

犬や猫は、ほんとうにあつという間に成長する。仕方がないことなのだろうが、こう言いたい気持ちとは分かれる。理屈を言えば、急いで生きると命を縮めるよということになるのだろうが、しゃべり言葉を前面に出して、そんな理屈を感じさせない配慮が感じられる。

皆を無事に連れて帰りし長靴たちストーブ前に整列
をする
伊藤亜佐里

この冬は各地で大雪が降ったようで、作者が住む富山県も大変だったらしい。この一首、雪国の家庭ならではの光景を的確に表現している。家族は何人おられるのだ

ろうか。昔ふうの十人近い家族をイメージして、「整列」のイメージを楽しみたい。

伸びてゆくチーズハットグ思わせるチェロの響きの
香ばしき夜
門田祥子

チェロの響きが香ばしいという。だれもが、えっ！と思う。「チーズハットグ」というままだはやって間もない韓国のスナックを登場させ、チェロの音色とチーズハットグとを「伸びてゆく」という語で強引に結びつけて、その強引さをユーモアの味に変えた力わざ。

丼の蓋の様な笠雲を二重に冠り富士重たかる
勝山多見子

富士市に住み、毎日近くに富士山を見ている作者ならではの富士山の歌である。私にはよく分からないが、笠雲が丼の蓋のようなかたちをしているのは珍しいことなのだろう。富士山の笠雲は、ふつう、雨になる前兆とされているが、ここではそんなウィキペディアの見方ではない、すなおな驚きを表現して魅力的である。

マドラーがなければ指もて水割りをかきまぜて飲む
佐佐木幸綱
田中徹尾

この作者の今月の八首は、名古屋歌会のことを題材にしている。この作も、私が名古屋歌会に出席した折に取材しているらしい。そう言われれば、私は飲食のおりによく手を使う。素手でものをつかむ。寿司屋では寿司は手づかみだし、菓子なども、そういえば手づかみで食うことが多い。この一首、作者はそうとう驚いているふうで、こちらも驚いている次第。